

特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2014年度 活動報告書



震災から5年目の支援に向けて

レスキューストックヤード代表理事 栗田暢之



あの日から4年の月日が過ぎました。まずは被災された方々にあらためてお見舞いを申し上げます。

ご周知のとおり、震災当初より活動拠点を置かせていただいている宮城県七ヶ浜町では、現在も津波で甚大な被害のあった沿岸部の護岸工事や高台移転に向けた造成工事などが懸命に続けられています。他の市町村に比べれば、復興事業は早いといわれています。町役場や関係者の不断の努力の賜物だと敬意を表します。一方で、被害を受けた町民にとっては、他の市町村と比べることにあまり意味はありません。被災者は行政区の単位ではなく、一人ひとりです。この意味で何とか気持ちを切り替え、「やるしかない」と明日に向かっていく方がいる傍らで、あの日から時間が止まってしまったような方もおられます。

当方の支援活動のもう一つの柱に「広域避難者支援」があります。福島県を含む被災3県、周辺のホットスポットと呼ばれる関東地域から約500世帯・1,200人が愛知県に避難されていますが、これらの方々の支援拠点である「愛知県被災者支援センター」の運営を担っております。あれから同じだけ月日は流れ、同様に「やるしかない」と愛知県

での暮らしを懸命に生きておられる方がいる傍らで、故郷を離れた罪悪感や将来への不安を抱えたまま、なかなか前向きになれないという方もおられます。

今年は阪神・淡路大震災から20年の節目の年でもあります。1月17日の現場はやはり涙で溢れていました。いくら月日が過ぎようとも、大切な人を失った悲しみは消えるものではありません。ましてや4年という時間はあまりにも短いともいえます。この間、ずっとそばで励まし続けたつもりですが、これまでの活動を振り返ったとき、本当に被災者の悲しみや苦悩に添えてこられたのか、と自責の自問自答は続きます。

こうした現実の狭間で、世間では早くも「風化」が叫ばれています。震災当初、あれだけ「がんばろう！日本」と応援した記憶の傍らで、今日この瞬間にも「生きづらさ」を感じている方の存在をどうか見放さないでと逆に叫びたい。そして、私たちNPOは、いずれも後者のペースに合わせて、時には厳しくも励まし続けていく伴走者の役割があるのだと考えています。

今年度も本当に多くの方々、団体、企業の皆さまから、物

「頑張る力」を支えていきたい

レスキューストックヤード常務理事 浦野愛



この1年間で七ヶ浜の風景は大きく変わり始めました。海沿いにはコンクリートの堤防が並び、高台の整地とともに、色とりどりの新しい家が次々に建設され、5カ所の災害公営住宅も完成に向けて順次工事が進められています。今までの混沌としていた状況から、少しずつ未来の暮らしが具体的になり、希望を持って次の一歩を踏み出した方もいらっしゃると思います。「なるべく元の地域の人たち同士がご近所になれるように」という町の配慮のもと、新天地での見守り体制づくりや、災害公営住宅入居者と移転地域との懇談会なども開催されています。このような動きの一方で、住民の方々とゆっくりとお話をしてみると、仮設住宅入居者、高台への移転者、自力再建者など様々な立場の人たちが、今もなお何らかの不安感を抱えていることが分かりまし

た。買い物・通院などの移動手段の確保、新たな人のつながりづくり、毎日の生活パターンの立て直し、子育て、健康問題、経済困窮など、あらゆる話が出てきました。「すべては自分たちの問題。自分たちが頑張るしかない。そう思っていて4年間何とか頑張ってきたけど、この先同じように頑張れるかどうか…。」この言葉は年齢や性別に関係なく、多くの皆さんに共通するものでした。私たちはこのような皆さんの声をもとに、異世代が集える町の交流拠点「きずなハウス」の運営、集会場での足湯や、町外のボランティアの方々との出会いやつながりづくりなどを継続してきました。大きな局面を迎える七ヶ浜で、せめて皆さんが不安を安心して吐き出せる、自分の気持ちや考えを整理できる、一時でも気分転換できるような場づくりをもうしばら

宮城県七ヶ浜町



七ヶ浜町は仙台市から15kmほど北東に位置する半島状の町。人口は約2万人、面積約13.3km²。

名前の通り「7つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛ん。「菖蒲田浜」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り交じった土地柄に。

スポーツ施設やホールが充実しており、外国人の避暑地だった歴史から造られた「国際村」では、地元の子どもたちを中心としたミュージカル劇団がつくられています。

震度5強の地震後、最大12.1mの大津波が襲来。菖蒲田地区を中心に沿岸の集落に壊滅的な被害
津波浸水面積4.8km²（町面積の36.4%）

死者105名、行方不明者2名、震災関連死3名

全壊674世帯、大規模半壊236世帯、半壊413世帯、一部損壊2,600世帯の家屋被害

町内36カ所の避難所にピーク時で6,143人の町民が避難

町内6カ所の仮設住宅に320戸、725名が入居

みなし仮設*には142世帯、410名が入居

（2015年3月2日現在）

*みなし仮設：民間住宅を国や自治体が借り上げて、仮設住宅の代わりとして被災者に提供したり、公営住宅や雇用促進住宅、被災者が自力で借りた賃貸住宅も仮設住宅とみなしたりした住宅を総称して「みなし仮設」とし、家賃などを国が負担している。



七ヶ浜事務局 2014 年度の活動

- 2014 年 4/13 復興グルメ F-1 大会 in 七ヶ浜へ協力
 4/29～30 石川県穴水町で視察ツアーと車座トーク開催
 6/8 七ヶ浜町田んぼアート 2014(田植え)へ協力
 6/21 安城・七ヶ浜文化交流会への協力
 6/24 第4回七ヶ浜住民車座トーク開催
 7/3 田んぼアート全国サミット in 米沢へ参加
 7/6 七ヶ浜トリアスロンへ協力
 7/13 町内野球場の芝移植事業へ協力
 7/14～15 うるうるパック事業で福島視察
 7/19 愛知県高浜市からの委託事業で七ヶ浜の仮設住宅での炊き出しや町民との懇談会、
 愛知県大府市からの委託事業でミニ講演会と仮設住宅でのコンサートを運営
 7/25 福島県富岡町視察
 8/2 松ヶ浜地区夏祭りへ協力
 8/9 しちがはま町民夏祭り 2014 へ協力
 10/5 親子すまいるフェスタへの協力
 10/19 あさひ園まつりへ協力
 10/25 七ヶ浜町田んぼアート 2014(稲刈り)へ協力
 10/26 七ヶ浜外洋帆走協会交流企画へ参加
 10/29 JCN 現地会議 in 気仙沼へ参加
 11/2 河北新報社主催・今できることプロジェクト in 七ヶ浜へ協力
 11/5 津波防災の日シンポジウムへ参加
 11/15 みやぎ地域づくり交流会へ協力
 11/17 JCN 現地会議 in いわきへ参加
 12/4 ユニグループ・ホールディングス(株)主催の遠山保育所絵本贈呈式へ協力
- 2015 年 1/12 きずな号完成披露式
 1/18 国際ソロプチミスト名古屋から被災を受けた子ども会へ備品支援、贈呈式開催
 1/21～22 大谷派名古屋教区研修会へ協力
 1/25 あそぶさございん 七ヶ浜 de お正月へ協力
 2/27 JCN 現地会議 in 岩沼へ参加
 3/11 七ヶ浜町慰霊祭へ参列
 3/15 国連防災世界会議へ参加
 3.11 メモリアル企画「UMI-TSUNAGU 2015～伝え続けよう未来へ～」へ協力



七ヶ浜事務局 定期開催の活動

- 仮設店舗七の市商店街へのイベント応援・月1回
 仮設住宅集会場にて足湯・月5回程度
 花浜まじらん会送迎・月2回
 復興支援調整実務者会議への参加・月1回
 きずな工房定例会議・月1回
 七ヶ浜復興応援サポータープロジェクト運営会議・月1回

名古屋事務局 2014 年度の活動

- 2014 年 5/4～5/6 名古屋市「ゴスペルだよ全員集合」で、きずな工房商品の販売
 5/31 名古屋市「東別院トーク&ライブ」で、きずな工房商品の販売
 6/6～6/9 セケ浜町行きボランティアバス 66 陣の運行
 7/19～7/22 セケ浜町行きボランティアバス 67 陣の運行
 7/21 ユニグループ・ホールディングス(株)ドネーション企画「楽器寄贈贈呈式」の運営
 8/30 名古屋市のオーガニックカフェ・ギャラリー「空色曲玉」でゴスペル合唱団 Voices of Vision(VOV)によるきずな工房商品の委託販売
 9/11～9/12 名古屋市「商店街逸品名品テストマーケティング」できずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 9/13 「環境デーなごや 2014」で、きずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 10/4 「VOV15 周年記念コンサート」で、VOVによるきずな工房商品の委託販売
 10/25 供米田中学校地域防災大会できずな工房商品の販売
 10/26 「名古屋学院大学大学祭」で災害復興支援チームあすなろによるきずな工房商品の委託販売
 11/1～11/2 名古屋市「消費者生活フェア」で、きずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 11/6～11/7 名古屋市「商店街逸品名品発表会」で、きずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 11/14～11/17 セケ浜町と福島県会津美里町行きボランティアバス 68 陣の運行
 11/25 名古屋経済大学高蔵中学校の生徒によるきずな工房商品の委託販売
 11/29 新潟県刈羽郡「中越大震災 10 周年事業～つながる“絆” in 刈羽～」できずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 12/9 岐阜県大垣市「元気ハツラツ市」で、きずな工房商品の販売
 12/12～12/15 セケ浜町行きボランティアバス 69 陣の運行
- 2015 年 2/22 RSY主催「ボランティア大交流会 2015」で、きずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 3/1 「なごや環境大学オープンキャンパス」できずな工房商品、セケ浜町の物産販売
 3/11 東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや運営(実行委員として)
 3/13～3/16 セケ浜町行きボランティアバス 70 陣の運行



足湯ボランティア

住民とボランティアが一对一でゆっくりと会話を交わし、住民の声である「つぶやき」を聴く活動です。話す内容は主に何気ない日常会話ですが、中には悩みや先の不安などを話す方もいます。それらをまとめ、専門機関などにつなげることで、個別化した課題を解決することができます。実施回数は2011年3月から数えて累計300回、利用された住民は延べ3,400名、活動したボランティアは延べ1,750名を超えます。「足湯に来るとボランティアさんといろんなお話ができるし、こうやってみんなで集まるだけでも楽しい」と、住民とボランティアの交流のきっかけとして

の役割も担っています。現在もボランティアを募集しており、東北学院大学災害ボランティアステーションの学生ボランティアと連携し、毎月活動しています。



仮設住宅風除室補修事業

5月初旬、仮設住宅に住む方から「風除室で雨漏りがする」との声がありました。そこで町内の仮設住宅全戸にアンケート調査をし、技術者(大工など)やボラ



ンティアの協力を得て希望のあった35世帯に補修をしました。

5月31日からの2日間、ボランティアはボランティアセンターを通じて公募し、技術者は個別に声をかけ、町内外から延べ約30名が集まりました。風除室の劣化部分や隙間などにコーキング剤と防水テープで雨漏り防止の工事を施しました。主に技術者が施工し、ボランティアは工具の持ち運びや脚立を押さえるなどのサポートをしました。梅雨までに時間がなかでの作業となりましたが、技術者の指導で人が出ず、希望者すべての補修が完了しました。

松ヶ浜地区災害公営住宅入居者懇談会

災害公営住宅の建設が進み、2015年度から入居が始まるのを前に、「隣が誰になるのか不安だ」との声が聞かれました。そこで町内でもさまざまな地区の人が入り混じっての入居となる松ヶ浜地区の災害公営住宅入居者を対象に、町が懇談会を開催しました。

移転先でのコミュニティづくりを後押しするため、東北大学や社協、移転先の区長、民生委員などとともにRSYも参加。計5回のワークショップを通して入居者同士の顔合わせ、生活ルールづくりの支援、移転先の住民との顔つなぎの機会となりました。

町内5カ所、212戸を予定する災害公営住宅は、そ

れぞれ建設完了や入居の時期も異なります。移転先でのコミュニティ形成も大きな課題であると同時に、取り残されることになる仮設住宅の方々への寄り添いも必要です。



きずな公園・東屋補修

2013年7月にオープンした「きずな公園」は子どもたちの遊び場のみならず、年配の方の散歩コース、天気がいい日は親子でのピクニックに利用されるなど町民の憩いの場となってきました。今年度は1周年記念イベント、園内にある東屋の補修工事、子どもたちと一緒に公園清掃やイベントをする「きずなDAY」の定期開催、新遊具・うんていの設置、環境整備など、住民の方々がより安心して快適に利用してもらえるような事業に取り組みました。

園内から菖蒲田浜海水浴場が一望できるなどロケーションがよく、「いつもここから海を見てリフレッ

シュしてるんだ」と笑顔で話すご主人が印象的でした。きずな公園に関わる事業はブラザー工業株式会社と社員の皆さまにご協力いただいています。



被災を受けた子ども会への支援

七ヶ浜町内の子ども会は、地区公民分館などに保管していた行事の備品などが津波で流出し、震災から2年以上経ってなお、備品の購入ができていません。これを受け、国際ソロプチミスト名古屋を仲介し、町内3カ所の子ども会へビブス、タープテント、綱引

き用シューズが寄贈されました。1月には地区対抗町民綱引き大会が開かれ、参加した小学生は「去年は1勝もできずに終わってすごく悔しかった。今回は名古屋の皆さんのおかげで決勝まで進むことでできてうれしい。来年も頑張りたい」と喜んでいました。



きずな工房

被災者の生きがい・集いの場づくりを目的として、七ヶ浜町社会福祉協議会が2011年12月にオープンした「きずな工房」も3年が経ちました。RSYは運営と手作り品の販売のお手伝いをしています。裁縫と木工の部門に分かれ、毎日10名程度の利用者がアームカバーやコースター、インテリアのミニ椅子など10種類以上の製品を手作り。ミニポーチやつるし飾りは町内外で販売し、売り上げの一部は製作者に還元。今年度は七ヶ浜町の姉妹都市である米プリマス市へ製品を寄贈するなど、恩返しを込めた社会貢献も進めて

います。



きずな号

「未来の子どもたちに幸せな笑顔を贈ります」をテーマに、株式会社サークルKサンクスが全国約 6,000 のコンビニエンスストア店頭で8月1日～11月30日にかけて計 19,063,970 円の募金を集め、これを基に RSY が委託を受けて被災地の子どもたちのために「学び舎バス・きずな号」の運行を始めました。

「きずな号」はマイクロバスに椅子や勉強机を8組

備え、約 50 冊の本を読める図書機能もあり、普段は七ヶ浜町内の仮設住宅やきずなハウスなどを巡回し、子どもたちの読書や自主学習スペースとして利用されています。座席などは可動式でベンチシート型に変えられ、サロン活動などにも使えます。週末には大学生による学習支援や、定期的な体験学習企画なども開かれています。



楽器寄贈の橋渡し

ユニーグループ・ホールディングス株式会社は飲料メーカーなど各企業の協賛を得て、4月24日から5月7日まで、サークルKサンクスなどグループ各店舗で扱う対象商品の売り上げの一部から 350 万円を寄付金として集めるドネーション企画に取り組みました。

RSYはその橋渡し役として、震災の被害を受けた

仙台市の南材木町小学校、折立小学校の2校を紹介。寄付金でトランペットやフルートなどの楽器を購入することになり、7月21日に南材木町小学校で贈呈式をしました。同校吹奏楽団の児童は「演奏を通して地域の皆さんを元気づけていきたい」と話し、地域の人たちへのお披露目も兼ねて素晴らしい演奏を聴かせてくれました。



きずなハウス

「ホッと一息つける場所がほしい」「子どもたちの集まる場所がない」「七ヶ浜町のお土産や情報がまとまっているところがほしい」などの住民の声を受け、12月14日に仮設店舗、七の市商店街内に交流スペースとして「きずなハウス」がオープンしました。誰でも利用できる休憩用のテーブルやイスの設置、大人も子どもも楽しめる180種類以上の駄菓子やくじ引き、



きずな工房の製品をはじめとした町のみやげ販売、町内の各種イベント情報やお知らせを貼りだす掲示板など、さまざまな機能があります。RSYの事務所としても使わせていただいております。開所時間は10:00～18:00（毎週水曜日定休）。

子どもから大人まで沢山の町民に利用されており、商店街に新たなにぎわいが生まれています。



仮設店舗「七の市商店街」

設立3周年を迎えた七の市商店街は毎月1回の定例ミーティングを通じ、地域活性化のための商店街独自イベント「んめえのあつと市」を毎月開いています。商店街として町のイベントへの出店依頼も多く、仮設住宅住民のみならず沢山の町民に利用されています。高台移転などにより店舗数が変わりましたが、設置当初からの「町の憩いの場所にしたい」「七ヶ浜町が頑張っているところを見せたい」という想いは変わらず、日々営業されています。

4月に開催された岩手、宮城、福島の仮設店舗が集

い、No.1 復興グルメを決める「復興グルメF-1大会 in 七ヶ浜」では、七の市商店街の「七宝汁」がグランプリを獲得しました。



七ヶ浜復興応援サポータープロジェクト

「ボランティアにとって七ヶ浜を『被災地』ではなく『また訪れたい場所』にしてもらうため、内から外



への情報発信」を目的として、復興に携わる地元団体と実行委員会をつくり、復興の歩みや町の歴史、イベント情報案内などをブログ、Facebook、twitterなどのウェブ媒体で伝えています。設立から2年経ったこのプロジェクトは、町外ボランティアだけでなく、町民からも利用されています。ブログのアクセス数は毎月平均約8,000アクセス、Facebookのいいね！数も1,200を超えており、震災の風化防止や七ヶ浜に関わりつづけたという想いを持った町外ボランティアを七ヶ浜町や町民とつなぐツールとなっています。

被災地交流（会津美里、丹波）

2013 年度から、檜葉町の方々の避難先である会津美里町の宮里仮設住宅との交流を続けています。14 年度は自治会からの要望で夏まつりや雪まつりなど自治会主催イベントに参加、支援をしました。また、「次は僕たちが応援したい」と語る七ヶ浜の住民を連



れて宮里仮設住宅を訪問しました。この動きが、8 月に土砂災害が発生した兵庫県丹波市への支援にもつながり、七ヶ浜の海鮮類を炊き出しとして振る舞い、断水地域の住民の方々に大変喜ばれるなど、被災地間交流が積極的に行われました。



うるうるパック

仮設住宅などでの避難生活を余儀なくされている方は、震災4年が経っても23万4千人に及んでいます。2015 年度以降、この方々が順次、高台移転や災害公営住宅に移られることになり、新たなつながりづくりが必要との声が聞かれます。そこで、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）の助成を受けて、被災地の社協などと、地域経済に影響を与えない程度の粗品をパック詰めする「うるうるパック」を引越し時に贈呈しています。3月にRSY小牧倉庫でボランティアの協力でパック詰めをしました。一人ひとりの暮らしの状況についてお聞きするコミュニ

ケーションツールとして、また被災地域全体の新しいコミュニティが豊かに醸成されることに役立てていただくことを目的とし、2015 年度末までに約15,000 セットを配予定です。



3・11メモリアルイベント

「3月11日を想う日／ボランティアと町民の再会の機会を作りたい」「七ヶ浜町の頑張っているところを見せたい」という住民の声から始まったこの企画は2012年3月から数えて今回で3回目の開催となりま



した。実行委員会の主要メンバーである七ヶ浜町のボランティアセンターをはじめとした町内ボランティア団体で運営しています。今年は「伝え続けよう未来へ」というサブテーマを加えて、町内の子どもたちに来てもらい、「町の復興の様子や町外のさまざまな応援もあって、今がある」ということを学んでもらいました。3月15日当日は町内外500名以上の方々が会場を訪れ、ボランティア活動写真の展示や交流ダンス大会、食の交流、語り部、防災講演会、追悼式に参加し、各自がさまざまな想いを胸に時間を過ごされました。

車座トーク

さまざまな不安を抱えた七ヶ浜町の町民や行政職員らと、阪神や中越の経験から復興に携わる研究者、支援者を交えて町の将来を「ひざ詰めで」「ざっくばらんに」話し合う場を設けました。

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）の助成を受けて、2013年12月に町内で第1回を開催。2014年2月の第2回で他の被災地の復興状況を見たいという声を受け、4月の第3回は能登半島地震の被災地である石川県穴水町を会場にしました。6月の第4回では町民と研究者らも打ちとけ合い、前向

きで深い議論に発展していました。



田んぼアート

七ヶ浜町は津波で9割以上の農地が浸水の被害を受けましたが、延べ8万人を超えるボランティアの尽力で農地を含めた町内のがれきの撤去が進みました。そのお礼の意味で七ヶ浜の若手農業者が愛知県安城市を表敬訪問した際、地元で行われていた田んぼアートに感銘を受け、七ヶ浜でも「七ヶ浜田んぼアート2014」が開催されることになりました。



ボランティアへの感謝の気持ちや七ヶ浜の地域おこし、復興を願い、安城の農家から古代米をいただくなどの全面的な協力を得ながら企画運営しました。田植えイベント当日は雨天となりましたが、町民と安城の農家、ボランティアが共同で田植えをし、秋には七ヶ浜町章と握手のマークがくっきり浮かび、町民に笑顔と元気を与えてくれました。



漁業支援

津波で家や船、漁具など生活の基盤のすべてを失いつつも、刺し網・素もぐり漁で再建を目指す漁師が立ち上げた「七ヶ浜ぼっけクラブ七友会」の運営と販売促進をサポート。年に3回にわたり、七ヶ浜名物ぼっけ汁とワタリガニのセット、白魚と生わかめのセット、ワタリガニとアワビのセットを販売しています。

名古屋でも「とても新鮮で安くておいしい」と評判

で、少しずつ固定ファンも増えています。七ヶ浜町内ではイベントでの販売をきっかけに「町で獲れた魚を日常的に食べたい」という声が多数聞かれ、今後は訪問販売なども視野にいたれた取り組みを検討中です。

「未来の子どもたちのために漁業で活気づいた町を取り戻したい」という漁師さんたちの夢を引き続き応援していきます。

ボランティアバスの派遣

生活協同組合連合会アイチョイスやブラザー工業株式会社からの支援を受け、計5回（66陣 6/6～9、67陣 7/19～22、68陣 11/14～17、69陣 12/12～15、70陣 3/13～16）のボランティアバスを運行し、約70名のボランティアを名古屋から送り出しました。仮設住宅の住民との交流会や、七の市商店街、七ヶ浜町ばっけ倶楽部七友会が主催するイベント運営サポートを中心に、11月には昨年度から交流のある会津美里町・宮里仮設住宅に七ヶ浜の町民と一緒に訪れ、親睦を深めました。



レインボープロジェクト

2012年3月から毎月7日を「しちがはまの日」として、名古屋で復興スイーツを販売しています。この



企画は株式会社山田組、株式会社ナックプランニング、名古屋市中川区にある洋菓子店「フィレンツェ」と、七ヶ浜「きずな工房」とのコラボ企画です。

「きずな工房」でひとつひとつ手作りされた巾着袋やエコバッグとお菓子のセットを販売。セットには返信用のはがきがついていて、作り手にメッセージを送れるようになっており、購入者と作り手との交流を生んでいます。

工房を利用している方々からは「ここに来てみんなと話しているとよい気分転換になる」「生活のリズムが整ったし、自分が作ったもので誰かが喜んでくれるならうれしい」などの声が聞かれています。

RSY758（ボランティアグループ）

RSY758は、東日本大震災のボランティア活動をきっかけに「被災地を想い続ける」「災害に負けない」「できることから行動しよう」をテーマに、RSYに関わるボランティアが結成したグループです。

昨年に引き続き、9月にはランニング1周ごとに30円を被災地へ寄付する「24時間チャリティーリレーマラソン IN 名城公園」に参加し、42名のボランティアでタスキをつなぎ切り、2月には名古屋YWCAで「ボランティア大交流会 2015」を開きました。

各種イベントへ出展の際には、震災のパネル展示や物販販売など、震災を風化させないための活動にもボ

ランティア一丸となり取り組んでいます。今後も被災地を想い続け、自分たちの地域でできる備えを考えていきます。



東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

全国の災害支援関係のNPOやNGOなど約640団体が参加するネットワークで、栗田が代表世話人として参画しています。

被災3県で計33回の「現地会議」を開催、3人の地域駐在員を配置し、地域の状況を「足で稼いで」把握しています。2014年度は訪問で得た現地の課題の詳細をまとめ、全国に発信する「JCNレポート」を発刊しました。「広域避難者支援ミーティング」は全国で約20回開催、国や関係省庁とも定期協議を開いています。4年目の活動をむかえ、震災を忘れない気持

ちをあらわし、気持ちの風化を止める「Walk with 東北」プロジェクトも始めました。各団体がマークを自身の活動に使い、企業や団体・個人の活動に一体感を生み出し「点を面にする」ことを目指します。



愛知県被災者支援センター

愛知県には2015年2月現在、465世帯1,137名が県外避難されています。避難者一人ひとりに寄り添い、支援するため、県はRSYを含めた県内のNPO4団体にセンターの運営を委託してきました。

2014年度はセンタースタッフ、市町村担当者、保健師らによる「全戸個別訪問（名古屋市は独自実施）」を行い、全世帯の状況把握と、これまでセンターと交

流がなかった方とのつながり作りに注力。避難によって失った活動場の再開、避難先での新しいコミュニティ作りサポートとして「生き甲斐事業」も新たに開始し、自立応援活動も展開しています。

震災から4年が経過し、家族状況の変化などによってニーズも変化していく中、避難者一人ひとりの決断を尊重し、今後も支援を継続していきます。

東日本大震災支援ボランティアセンターなごや

名古屋市社会福祉協議会が主体となり、RSYや各区の災害ボランティアネットワークで構成するなご



や防災ボラネットが協力して運営、市内に避難されている方の支援などに当たっています。

震災直後は物資提供や転居支援などが中心でしたが、現在はひとり暮らし高齢者らの生活支援や被災者同士の交流機会の提供など、ソフト面の支援に力を入れています。

設立時からのモットー「寄り添い、ゆっくりと、でも全力で応援します」を大切に、今後もなごや防災ボラネットなどの協力を得ながら、引き続きニーズに合わせた支援を展開していきたいと考えています。

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）

企業やNPO、全国社会福祉協議会、中央共同募金会などで構成されるネットワーク組織。RSYは同組織の応援資金から助成を受け、岩手・宮城・福島での「うるうるパック」配布支援事業に取り組んでいま

す。地元の支援者が仮設住宅などを訪問し、うるうるパックを直接手渡すことで会話の機会を得て、生活や健康状態を把握するきっかけにしてほしいと、2ヵ年で15,000セットの配布を目標にしています。



七ヶ浜町長 渡邊善夫

R S Yの皆様には、震災直後から避難所や仮設住宅集会所でのボランティア活動をはじめ、数えきれないほどのご支援を賜っておりますことに七ヶ浜町民を代表し厚く御礼申し上げます。

東日本大震災の発生から4年が経過し、本町ではこれまで、被災された方々の住宅再建を最優先課題とし一日も早い復興に向け日々取り組んでまいりました。今年は、高台住宅団地で最後となる花淵浜笹山地区が完成する予定であり、すでに整備を終えた4地区の団

地では着々と住宅が建築されております。また、町内5箇所の災害公営住宅も今年中の完成に向け建築工事が進められております。

今日、我が町が復興に向け着実に歩みを進めることができますのも、皆様をはじめ多くの皆様から賜った温かいご支援があったからこそであり、改めまして深く感謝申し上げます。

R S Yの今後ますますのご発展と、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



社会福祉法人七ヶ浜町社会福祉協議会会長 鎌田節夫

東日本大震災から4年が過ぎました。R S Yの栗田代表理事、浦野常務理事をはじめスタッフの皆さまには、発災3日目よりご支援ご協力を頂き5年目を迎えております。

また貴法人を通じまして全国の皆さま、多くの企業関連の皆さまから長きに亘り、七ヶ浜町に対する物心両面のご支援を賜っております事、衷心より御礼と感

謝を申し上げます。

ご承知の通り当町の高台移転も進み、災害公営住宅も順次完成へと近づき、少しずつ復興へと歩んでおります。その一方、未だ不自由な生活を余儀なくされている方々もおられます。R S Yが続けて来られた被災者の皆さんに寄り添った心の癒し活動とこれからの復興を見守って頂きますようお願い申し上げます。



仮設店舗「七の市商店街」代表 星仁

大震災から4年を迎え、町の復興も加速を増し、災害公営住宅完成や高台移転も先が見え、私たちの商店街も、予ねての懸案である「一歩前へ」がいよいよ具体化してきました。店主達もそれぞれの道へと着々と準備を進めているところです。思えば4年前のオープン以来、多くの方々よりご支援を戴き、

取り分けR S Yの皆様を通じて知り合ったボランティアの方々、そして七の市商店街を愛し見守り続けて頂いた皆様に感謝申し上げます。風化が叫ばれる中築き上げられた、多くの皆様との「絆」をこれからも大切にしながら、邁進していく所存ですので、今後共宜しくお願い申し上げます。



七ヶ浜町ぼっけ倶楽部七友会代表 鈴木直也

震災が起き4年が経ちました。振り返れば本当に数えきれないほど色々なことがあります。町、漁協の復興、家の再建をめざし自分自身に出来ることを精いっぱい頑張った日々。正直どれをとっても甘く・簡単に進めるものではありませんでした。でも、

全国の多くの方々に支えられ、励まされ自分たちの信じた復興への道のりを力強く歩んでいると思っています。

これから先も感謝の気持ちを忘れず、人との縁を自分自身の宝として頑張っていきます。



きずな公園利用者 横田マツ美

R S Yの方々に支えられて

東日本大震災の津波で家を流され、現在も仮設住宅でお世話になっています。私がR S Yという存在を知ったのは2人の子ども達を通じてでした。R S Yが建ててくれたきずな館でボランティアさんや職員さんたちと遊んで帰ってくる子どもたちは、家を失った不自由さを埋めるように楽しんでいました。他にもR S Yにはたくさん支援してもらいました。遊び場を失った七ヶ浜の子ども達のために立派な遊具が揃ったきずな公園や車中で勉強ができるバス、地区の子ども会行事で使用するテントやシューズなど支援をしてくれる企業を探してくれました。それらの物も津波で流失してしまい、高額のため今の子ども会では用意でき

ずにいたので、とても助かりました。そのシューズで出場した今年の綱引き大会で私たち菖蒲田浜地区は、中学生の部は準優勝、大人の部は3位入賞することができて、みんなで喜び合うことができました。宮城で一番小さく目立たない町へ、たくさんの企業様が資金を出してくださり、どんな感謝の言葉をもってしても足りないくらいです。同時にその企業様と引き合わせてくれたR S Yにも大きな感謝です。R S Yは今では七ヶ浜になくてはならない大きな存在です。この震災は悲しくて辛かったけど、この震災があったからこそ出会えた全国の、世界のご縁をずっと大事にしていけたらと願います。



福島県会津美里町・宮里仮設住宅自治会長 渡辺敏正

震災から4年が経とうとする今、檜葉は大切な時期に直面しています。これから檜葉町がどうなっていくか、先がまだはっきり見えません。昔の檜葉に戻るなら帰りたいとは思いますが、今の状況では戻る気にはなれません。会津も住めば都。先の事はゆっくり考えたいと思います。

この避難生活で、皆様からの支援により元気や笑顔、人と人の絆、いろいろと支援者の方から頂きました。

支援者の方々には長年に渡りご支援頂き、誠にありがとうございました。支援だけでなく、会津へ気軽に遊びに来てもらえたら嬉しく思います。



安城・七ヶ浜交流プロジェクトチーム代表 石川和明

東未曾有の大災害から4年

もう4年…、まだ4年…。

思いは人それぞれ、改めて災害の巨大さを感じると共にお見舞い申し上げます。私たち、安城・七ヶ浜交流プロジェクトチームの支援交流の始まりは「いつかいっしょに笑おう・東日本」の田んぼアートと東北地方のお茶うけにする漬け物用の野菜を送る活動からでした。昨年は七ヶ浜でも「ガレキの田んぼからアートの田んぼへ」をテーマに全国から駆けつけて頂いた

多くのボランティアの皆さまに感謝を込めた田んぼアートを地元有志の皆さまを中心に開催、また三河万歳を通じて文化交流も出来ました。「いつまでも忘れない！」物資を送る支援から災害について共に学び合い、心の通じ合う活動へと変化してきました。人と人の繋がり、まさに「絆」の大切さを強く感じます。これからも末長い交流活動が出来る事を願ってやみません。



ブラザー工業(株)コーポレートコミュニケーション部 松村聡

ブラザーグループは「絆ファンド」という募金活動やボラバスによる七ヶ浜町でのボランティア活動、製品寄贈と製品修理の事業を通じた支援活動、そして、ミシンを使った従業員によるわかめ漁の漁具を作るブラザーらしい支援活動などを継続して行ってきました。今までも七ヶ浜町の皆様のニーズを正しく把握して、これに応えるような支援活動を行

って参りました。その際にRSYには情報収集と的確なアドバイスをさせていただいており、RSYのご協力のお蔭で意義のある支援活動ができましたことを、栗田様はじめスタッフの皆様へ感謝申し上げます。震災から4年が経ちますが、今後もブラザーグループは住民の皆様のニーズに基づき、従業員参加で復興支援活動を継続的に行って参ります。



ユニーグループ・ホールディングス(株)環境社会貢献部長 百瀬則子

東日本大震災被災地の子ども達に夢を贈る

東日本大地震が発生した春から、4回目の季節が巡ってきます。

遠く離れた愛知県にいと、思い出すことが少なくなり被災地の子ども達のことを思いやる気持ちも薄れがちです。

でも、七ヶ浜を訪れると海岸には松が疎らに立ち、学校の校庭には仮設住宅が建っています。七ヶ浜の子ども達がその中で元気にたくましく育ち、夢を持ち、夢をかなえるための力を持てるような、そんな活動をしているRSYをユニーグループは2014年より支援

しています。

それは毎日お買い物に立ち寄るスーパーやコンビニで、お客様が購入した数量に応じて寄付金を募るドネーションや、店頭募金箱での寄付を集め、子ども達のクラブ活動や課外活動の支援、また放課後の集いの場になるバス「きずな号」の寄贈などで、全国のお客様の善意が集められた活動です。

ユニーグループはこれからも「忘れないよ、みんなのこと」を合言葉に、子ども達の夢を贈る活動をRSYと一緒に進めていきます。



(株)サークルKサンクス運営総務本部運営総務部運営企画 金子修之

全国のサークルK、サンクスの店舗で「東北復興支援募金」をスタートし、8月～11月の期間に集まった募金については、七ヶ浜町を東北の活動拠点とするRSYにキャンピングカーを改造した学び舎「きずな号」を贈呈しました。

震災から4年が経過した現在でも仮設住宅での暮らしが続き、震災前の生活環境には程遠い状況の中、サークルKサンクスでは引き続き「東北復興支援募金」等、七ヶ浜町や東北の子ども達がもっと笑顔になるよう支援してまいります。



生活協同組合連合会アイチョイス専務理事 大宮隆博

「想う 支える つながる」を合言葉に、これからも

阪神淡路大震災から20年が経ちました。私たちとRSYとのお付き合いも20年になります。そして、東日本大震災から早いもので4年が経ちます。被災地を訪れる度、一步一步復興へ近づいていることを感じつつも、未だに行方不明者は2,500名を超え、福島第一原発の事故処理は進むどころか、汚染水問題など、そう簡単にはいかない状況を見ると、まだまだやるべきことはたくさんあると感じます。

それでも、七ヶ浜町の人たちと触れ合うと、みんな

立ち止まっているわけではない、前へ前へと進もうとしていることを実感します。七の市商店街イベントの活気、地域の人たちを中心に盛り上げようという気持ちに触れ、今後も寄り添う気持ちで長いお付き合いができたらと考えています。

アイチョイス（連合会、あいち生協、生協ぶちとまと）は、「想う 支える つながる」を合言葉に、これからもRSYとともに、取り組みを継続して行きたいと思います。



国際ソプロチミスト名古屋会長 川村正美

「ともに前へ」

国際ソプロチミスト名古屋は、RSYのお力を借りて七ヶ浜町に支援活動をしています。今年は、津波で流された子供会の備品をお届けし、そのご縁で7名の会員が町民綱引き大会の応援に出かけました。新しいシューズを嬉しそうに抱えた子供会のみなさんと交流を深め、「ともに前へ 七が浜」と書かれた真っ赤なTシャツを着て力いっぱい応援しました。しかし、私たちはそれ以上のパワーと感動をみなさんから頂

きました。

現地へ赴いて、まだまだ私たちにできることがあること。あの震災を忘れてはいけないこと。改めて痛感しました。

「ともに前へ」の気持ちを忘れないように4月12日、名古屋市能楽堂で、気仙沼出身の畠山美由起さんのチャリティーコンサートを開催します。「ともに前へ」の気持ちを会場のみなさんにお伝えしたいです。



洋菓子フィレンツェ社長 小島祐助

東日本大震災が発生してまもなく、私は被災された方々にどのような形でお役に立てるのかと考えました。そんな時、(株)山田組を通じて「七ヶ浜町にきずな工房ができた」という話を聞きました。生活のリズムを整え、居場所や生きがい、仕事づくりの場として設置されたという目的を聞き、大きな感銘を受けました。そこで、当店の洋菓子と工房の手

作り品をセットにし、「復興スイーツ」として、2012年3月から店頭販売を開始しました。

2015年3月までの3年間、毎月継続できたことは、ささやかながら震災の風化防止の一助となったと思います。何より、少しでも工房の方々の元気を支えることができたのなら、これほど嬉しいことはありません。

いままでとこれからと

R S Y七ヶ浜事務局スタッフ 郷古明頌



ついに2014年秋季から高台移転が始まった七ヶ浜町ですが、不慣れな集合住宅（災害公営住宅）での生活の不安、地区移転によるコミュニティの再形成、観光のメインとなっていた菖蒲田浜海水浴場の復旧の見通しなど課題が消えた訳ではありません。こういった震災から4年目で出てくる新たな課題に対しても支援が必要です。そして、これから一番必要になってくるのは『七ヶ浜町はこれからどうしていくのか』ということです。

現在、私たちRSYは全国、全世界の皆様を支えられ、住民の声が聴ける距離間で活動を続けています。この支援者と被災者という立場だけでなく気軽に話せるご近所さんのような関係、存在こそが復興の鍵だと私は思います。「これから『これ』をやっていきたい』『これ』が不安だ…」という声に寄り添えるように、2011年度からずっと続けている住民の皆さんとの信頼関係を大切に、活動していきたいと思えます。

七ヶ浜町の今後を見据えて

R S Y七ヶ浜事務局スタッフ 松永鎌矢



東日本大震災から4年が経過し風化も進む中、RSYを通し、まだまだ七ヶ浜町へ応援の気持ちをいただき、本当にありがとうございます。2014年度の七ヶ浜町は、移行期に向けた準備の年となりました。いよいよ次年度は、応急仮設住宅から高台移転や災害公営住宅等への移転が本格的に始まります。高台移転される方で、「これでボランティアさんも家に泊められるようになるから、遊びにおいでよ」との声を聞き、ようやくここまで来たんだなとうれしく思います。一方で、移転先は狭く不便だった仮設住宅よりも環境は整備されていますが、新生活に必要な備品購入(カーテ

ンなど)による経済的な負担、再び「初めまして」からの始まる隣近所とのお付き合い(コミュニティー再形成)が被災者の不安であり、また支援者にとっての課題でもあります。次年度にかけて大きく環境が変わる中、RSYがこの4年間でつちかった経験や人とのつながりを活かし、移転先での被災者の不安や悩みを解消できるように、寄り添った活動を続けていきます。また、外部支援者である以上は「いつまでも」というわけにはいかず、RSYとしての活動と意思をしっかりと地域資源につなげていけるような働きかけもしていきます。



特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
東日本大震災 被災者支援
2014 年度 活動報告書

2015 年 3 月 31 日発行

特定非営利活動法人レスキューストックヤード
名古屋事務所

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter [rescuestockyard](#)

facebook [rsy.nagoya](#)

七ヶ浜事務所

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町字吉田浜 5-9

七の市商店街 101 号室